

館長室 ◆ ようこそ 28

『袖振り合うも多生の縁』

図書館長 古川 聡

朝、5時半過ぎの高速バスに乗って東京駅に向かい、電車を乗り継いで玉川上水まで通っている。冬の間は真っ暗で寒い道を歩かなければならず辛かったが、春の訪れとともに周囲も明るくなり、朝日を浴びながら歩くので心做しか気が軽くなる。こうして早朝の道を数分歩いてバス停に着くと、いつもの顔ぶれが揃っている。互いに名乗る訳でもなく、互いにほんの軽く会釈をして無言でバスが来るのをじっと待つ。この光景が何年も続いている。

私は、進行方向右側の一番後ろ、さらにその通路側の席を確保する。ここからだ車内を一望でき、道路の前方のみならず乗客の様子を観察することが可能になる。バスに乗ると、それぞれが毎日定位置に座り、ある人はカーテンを閉め、ある人は持参したエアークッションを膨らませる。そして私はリクライニングシートを深く倒す。こうしてほぼ全員が再び眠る準備ができた頃、バスは高速道に入っていく。これから1時間半ほどのお休みタイムである。

通学や通勤では、毎日同じ時刻の電車やバスに乗ることが多い。そうすると、顔はわかるものの、何と言う名前か、どこに通っている

のかもわからない人と毎日顔を合わせ、同じ時間と空間を共有する。袖振り合うも多生の縁という諺がある。道を歩く時に袖が触れ合う程度のことであっても、前世からの因縁によるという。バスの中で近くに座ただけであっても、それは偶然ではなく過去からの縁があったことだと考えると、毎日のように同じバスに乗る乗客同士は因縁どころではない。出会うための必然性があるのかも知れない。そう考えながら観察していると不思議な気持ちになる。

大学に入学した皆さんも、同じ電車やバスに乗った乗客と同じである。日本のあちこちで音楽を学び、そして国立音大を目指して集まってきたひとりひとは、たとえ専攻や専修、さらには学年が異なっても、あるいは学生と教職員であっても、何らかの縁があってこそこの出会いである。出会った最初はほんの少しの縁であるかも知れないが、4年間の大学生活を通して縁を絆に代えて、仲間や親友となつてほしいものである。そのような関係ができあがることで、これからの人生が実り多きものになるはずである。いろいろな人と積極的に袖を振り合ってほしいと考えている。

雑誌の部屋 19

「雑誌の部屋」は、当館が所蔵しているたくさんの雑誌を、もっとみなさんに手にとっていただけるよう紹介するコーナーです。4月になり図書館も新年度を迎えました。それに伴い今号では、昨年度に新しく加わった雑誌をご紹介します。音楽和雑誌が3誌です。

音楽和雑誌

学校音楽教育実践論集 年刊

●P5629……P1807『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育研究会紀要』より分冊。日本学校音楽教育実践学会の機関誌。大会で発表された会員の研究論文等を掲載。

日本チェンバロ協会年報 年刊

●P5631……2011年10月に発足した「日本チェンバロ協会」の年報。

日本楽譜出版協会会報 不定期刊

●P5633……1986年に発足した日本で唯一の楽譜出版社の集まりである「日本楽譜出版協会」の会報。

